



TOHOKU
UNIVERSITY

表紙写真解説

『東北大学百年史』全11巻

2010(平成22)年3月19日、第3巻「通史3」の刊行をもって、『東北大学百年史』全11巻が完結した。

本書の作成にあたっては、全体的な印象と各巻の具体的な印象を体現させる装丁が施されている。「通史」3巻・「部局史」4巻・「資料」4巻の表紙は、それぞれ蘇芳色(すおういろ)・鶯色(うぐいすいろ)・青鈍色(あおにびいろ)をモチーフとした色で色分けされ、全体の構成を具象化している。

背表紙天地に萩の飾り野、継表紙出し部分の地紋には萩の装飾文様が施されている。この萩は、東北大学の所在地である仙台市を象徴する植物であり、東北大学の公式ロゴマークにも取り入れられている。

題字は、国宝に指定されている「類聚国史」巻第25(東北大学附属図書館狩野文庫所蔵)から集字したものである。

東北大学百年史 編纂室ニュース

第15号(最終号) 2010.3.25

完結の辞

百年史編集委員長・編纂室長 今泉 隆雄 ————— 2

『東北大学百年史』編纂略年表 ————— 3

『東北大学百年史』(全11巻)略目次 ————— 7

『東北大学百年史』第二巻「通史二」の編纂を終えて

東北アジア研究センター教授・通史専門委員会第二部会長
平川 新 ————— 10

●点描・百年史

大学新聞の歴史(下)
百年史編纂室編纂員 中川 学 ————— 12

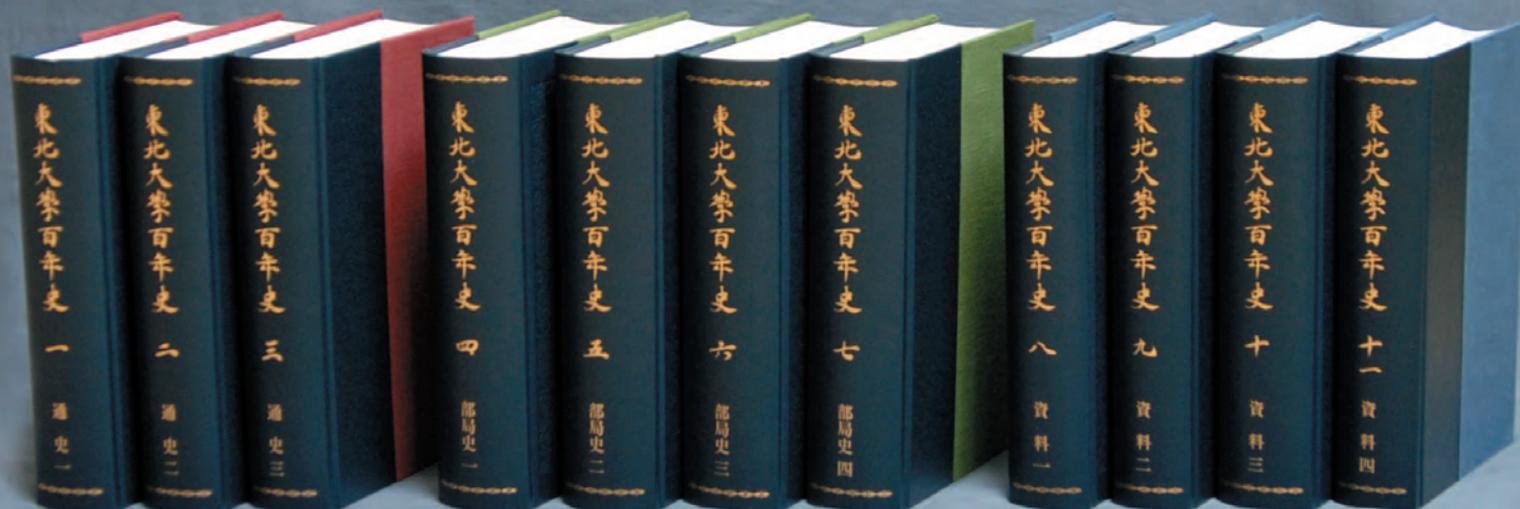
『東北大学百年史』第3巻、第9巻、第11巻

刊行のお知らせ ————— 17

* * *

受贈図書一覧 ————— 19

百年史編纂室日誌抄録 ————— 20



完結の辞

百年史編集委員長・編纂室長

今泉 隆雄



『東北大学百年史』は、本年度の「資料二」「資料四」「通史三」の3巻の刊行を以て全11巻が完結し、編纂事業を完了することとなりました。平成9年4月に編纂室を設置して本格的に編纂事業を開始してから、13年を要しました。全11巻は、『通史』3巻、『部局史』4巻、『資料』4巻からなり、総頁数がA5変型版で9627頁に及ぶ一大叢書であります。各巻の内容は7頁の略目次通りです。

編纂構想委員会によって定められた編纂の基本方針は、第一に東北大学の創立以来の沿革、第二に学術研究の成果と世界・日本・地域に対する学術的貢献、第三に高等教育機関としての社会的貢献、社会との関係、国際交流などについて明らかにし、さらに第四に次の世紀を展望するに足る指針を与えるものとするという4点であり、これを指針として編纂を進めました。

編纂の経緯は3頁の略年表の通りですが、平成9年に各部局に設置された部局史編纂委員会が「部局史」の編纂を先行して進め、次いで同11年に設置された通史専門委員会と3つの部会が「通史」の編纂を進め、編纂室は大学内外の資料を調査・収集して「資料」の編纂に当たるとともに、上記の2つの委員会と連携して編纂事業全体の要の役割を果たしました。

この編纂事業に関わった方々は、編纂構想委員会、編纂委員会、編集委員会、通史専門委員会・部会、各部局史編纂委員会、資料ワーキンググループ、印刷業者選定委員会などの各委員、部局史執筆者、編纂室構成員など、その総人数は約980人に及びます。

事業の完了に当たり、これまでご尽力・ご支援をたまわった各位にお礼を申し上げたく存じます。学内では、上記の編纂事業に直接関わった方々、また担当部局の本部総務部総務課、任官表の作成にご協力いただいた各部局の事務担当者、連携してこの事業に取り組んだ東北大学史料館、学外では資料の調査・収集にご協力いただいた諸機関、経費の多くをご負担いただいた東北大学研究教育振興財団、印刷に献身的にご尽力いただいた笹氣出版印刷株式会社、これら各位に対して深甚なる感謝の念を捧げます。

編纂事業の完了に伴い、編纂室は平成22年3月末日を以て閉じられ、収集された貴重な資料の多くは東北大学史料館に移管されます。

『東北大学百年史』編纂略年表

●1986(昭和61)年

5月20日 評議会にて百周年記念事業企画委員会設置。

●1993(平成5)年

7月20日 百年史編纂構想委員会設置。東北大学記念資料室の一角に委員会事務室設置。「東北大学百年史編纂構想」の検討を開始する。



(前列中央が西澤潤一総長、その右側が渡邊信夫委員長)

11月 4日 第1回百年史編纂構想委員会開催(委員長選出、委員会の役割、素案の検討)。

●1994(平成6)年

1月31日 第2回百年史編纂構想委員会開催。

3月30日 編纂構想委員が九州大学史料室に出張(大学史編集に関する調査)。

5月17・18日 編纂構想委員が名古屋大学史編集室・京都大学百年史編集史料室に出張(同上)。

5月27・28日 編纂構想委員が東京大学史料室・中央大学大学史編纂課に出張(同上)。

6月 2日 第3回百年史編纂構想委員会開催。

7月19日 第4回百年史編纂構想委員会開催。

9月 6日 第5回百年史編纂構想委員会開催。

9月26日 第6回百年史編纂構想委員会開催(百年史編纂構想の最終報告まとまる)。

9月29日 百周年記念事業企画委員会に対して「百年史編纂構想」(案)を提出。

●1995(平成7)年

1月 6日 百周年記念事業企画委員長が「百年史編纂構想」(案)を受理。

1月17日 百周年記念事業企画委員会が「百年史編纂構想」(案)に対する意向を表明。

2月 8日 第7回百年史編纂構想委員会開催(百周年記念事業企画委員会の意向を踏まえ「百年史編纂構想」(案)に加筆)。

2月17日 百年史編纂構想委員会が「百年史編纂構想」(案)を再提出し承認される。

12月12日 第8回百年史編纂構想委員会開催(編纂室設置までの活動について)。

12月18日 百年史編纂委員会設置。

●1996(平成8)年

2月20日 第1回百年史編纂委員会開催(編集委員会等について)。

9月17日 第2回百年史編纂委員会開催(編集委員の選出等について)。

10月 4日 百年史編集委員会設置。

第1回百年史編集委員会開催(委員長に今泉隆雄文学部教授を選出)。編集委員会の中に原案作成機能を持つ幹事会を設置。

11月21日 第1回幹事会開催(編纂事業計画等について)。以降、平成17年の第33回まで、原則として編集委員会毎に開催。

●1997(平成9)年

2月 7日 第2回百年史編集委員会開催(百年史編纂方針、編集・出版計画、編纂室構成、平成9年度予算、編集委員会幹事の増員について)。

2月18日 第3回百年史編集委員会開催(同上)。

4月 1日 東北大学百年史編纂室設置。東北大学記念資料室の館内に、室員室・事務室・資料保存室の3室を置く。

4月25日 第3回百年史編集委員会開催(平成9年度事業計画、『評議会議事要録』の取り扱い、刊行経費助成、編纂室開設記念講演会、東北大学百年史研究会について)。

5月16日 第1回東北大学百年史研究会開催。中野実氏(東京大学史料室)の報告。



1997年5月12日付「河北新報」



(左が中野実氏、中央が今泉隆雄編集委員長)

- 5月19日 第4回百年史編集委員会開催(『評議会議事要録』の取り扱いについて)。
- 5月19日 第4回百年史編集委員会開催(同上)。
- 6月 6日 百年史編纂室開設記念講演会開催。西澤潤一元総長講演。



- 6月 9日 第5回百年史編集委員会開催(『評議会議事要録』の取り扱いについて)。
- 7月31日 部局史編纂委員会の設置を要請。
- 8月18日 『評議会議事要録』マイクロ化開始。
- 10月 9日 『評議会議事要録』マイクロ化終了。
- 11月28日 第5回百年史編集委員会開催(部局史の編纂について)。
- 12月15日 『東北大学百年史編纂室ニュース』創刊号発行。

●1998(平成10)年

- 1月21日 第6回百年史編集委員会開催(部局史の編纂、平成9年度事業報告、平成10年度事業計画・予算案)。
- 2月16日 第6回百年史編集委員会開催(平成9年度事業報告、平成10年度事業計画)。
- 5月14日 第2回東北大学百年史研究会開催。酒井良樹氏(工学部史編纂室)の報告。
- 5月18日 第7回百年史編集委員会開催(平成9年度決算報告)。
- 6月29日 第7回百年史編集委員会開催(部局史の編纂、『評議会議事要録』の取り扱い、『教授会議事録』の利用について)。
- 7月29日 第8回百年史編集委員会開催(通史執筆体制、百年史の体裁、執筆要項、『東北大学小史』の出版、電子出版について)。
- 8月31日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第2号発行。
- 10月 5日 第9回百年史編集委員会開催(通史執筆体制、刊行計画、執筆要項について)。
- 10月19日 第8回百年史編集委員会開催(百年史編纂委員会規程の改正、『東北大学百年史』の編纂・刊行について)。

●1999(平成11)年

- 1月31日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第3号発行。
- 2月 5日 第10回百年史編集委員会開催(資料編収録の統計データ、通史専門委員会について)。
- 3月 8日 第11回百年史編集委員会開催(通史専門委員会、平成10年度事業報告、平成11年度事業計画・予算案、資料編収録の統計データについて)。
- 3月 8日 小山貞夫編纂委員長と今泉室長との話し合い。
- 3月15日 第9回百年史編集委員会開催(平成10年度事業報告、平成11年度事業計画・予算案)。
- 4月19日 第10回百年史編集委員会開催(平成10年度決算報告)。
- 7月21日 第1回百年史編集委員会通史専門委員会開催(「通史編」の編纂工程・編纂体制について)。
- 8月 2日 第2回百年史編集委員会通史専門委員会開催(部会について)。
- 8月27日 百年史通史編纂のための研究会(第1回)開催。
- 8月31日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第4号発行。
- 9月10日 百年史通史編纂のための研究会(第2回)開催。
- 9月27日 百年史通史編纂のための研究会(第3回)開催。
- 10月18日 百年史通史編纂のための研究会(第4回)開催。
- 11月 1日 第3回百年史編集委員会通史専門委員会開催(部会委員の増員について)。
- 11月 1日 百年史通史編纂のための研究会(第5回)開催。
- 11月12日 百周年記念事業企画「百年史編纂・刊行」に関する懇談会(東北大学研究教育振興財団久道理事・中塚理事・今泉編集委員長)。
- 11月12日 百年史通史編纂のための研究会(第6回)開催。
- 12月 1日 百年史通史編纂のための研究会(第7回)開催。
- 12月13日 百年史通史編纂のための研究会(第8回)開催。
- 12月24日 百年史通史編纂のための研究会(第9回)開催。

●2000(平成12)年

- 1月31日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第5号発行。
- 3月 6日 第12回百年史編集委員会開催(平成11年度事業報告、平成12年度事業計画・予算案)。
- 3月17日 第11回百年史編纂委員会開催(同上)。
- 4月17日 第12回百年史編纂委員会開催(平成11年度決算報告)。
- 7月10日 百年史通史編纂のための研究会(第10回)開催。
- 7月25日 第4回百年史編集委員会通史専門委員会開催(部会委員の増員について)。
- 7月25日 百年史通史編纂のための研究会(第11回)開催。
- 7月31日 百年史通史編纂のための研究会(第12回)開催。
- 8月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第6号発行。
- 8月10日 百年史通史編纂のための研究会(第13回)開催。
- 8月28日 百年史通史編纂のための研究会(第14回)開催。
- 10月 6日 第1回『東北大学百年史』印刷業者選定委員会開催。
- 12月15日 第2回『東北大学百年史』印刷業者選定委員会開催(本編部門・別編部門業者プレゼンテーション)。
- 12月25日 第3回『東北大学百年史』印刷業者選定委員会開催(電子媒体部門プレゼンテーション)。

●2001(平成13)年

- 1月25日 第4回『東北大学百年史』印刷業者選定委員会開催。印刷業者決定。
- 3月 7日 第13回百年史編集委員会開催。
- 3月15日 第13回百年史編纂委員会開催(平成12年度事業報告、平成13年度事業計画・予算案)。百年史編纂委員会廃止を決定。百年史編集委員会は、百周年記念事業準備委員会の下に置かれる。
- 3月31日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第7号発行。
- 5月21日 第14回百年史編集委員会開催(資料編ワーキンググループ、部局史について)。
- 6月25日 「東北大学史年表(第1版)」「部局史編纂のしおり(改訂版)」等の配布。
- 6月26日 第1回資料編ワーキンググループ開催。
- 7月23日 第2回資料編ワーキンググループ開催。

- 9月 3日 東北大学百年史編纂室webサイト公開。
- 9月14日 第5回百年史編集委員会通史専門委員会開催(通史構成について)。
- 10月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第8号発行。
- 10月 4日 第6回百年史編集委員会通史専門委員会開催(通史構成案について)。
- 10月24日 第7回百年史編集委員会通史専門委員会開催(部会の編成について)。
- 11月19日 第8回百年史編集委員会通史専門委員会開催(同上)。
- 12月 7日 第1回百年史編集委員会通史専門委員会・部会合同会議開催(同上)。
- 12月19日 第15回百年史編集委員会開催(百年史にかかる法令の統一表記について)。
- 12月25日 第2回百年史編集委員会通史専門委員会・部会合同会議開催(部会の編成について)。
- 12月25日 第9回百年史編集委員会通史専門委員会開催(部会長の選出について)。

●2002(平成14)年

- 2月 6日 「部局史1」編纂に関する懇談会(「部局史1」の刊行について)。
- 2月13日 第1回通史専門委員会部会長会議開催。
- 3月 5日 第16回百年史編集委員会開催(平成13年度事業報告、平成14年度事業計画・予算案、編集委員会要項の改正について)。
- 5月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第9号発行。
- 5月13日 第2回通史専門委員会部会長会議開催。
- 5月30日 第3回通史専門委員会部会長会議開催。
- 6月10日 第10回百年史編集委員会通史専門委員会開催。
- 6月24日 第17回百年史編集委員会開催(部会員の増員について)。
- 8月 9日 「部局史2」編纂にかかる説明会開催。
- 8月20日 第11回百年史編集委員会通史専門委員会開催。
- 9月26日 第4回通史専門委員会部会長会議開催。
- 10月10日 第3回百年史編集委員会通史専門委員会・部会合同会議開催(通史の編纂体制・工程について)。
- 10月10日 第1回通史専門委員会第一部会、第二部会、第三部会開催。
- 11月19日 第2回通史専門委員会第一部会開催。
- 11月20日 第3回資料ワーキンググループ開催。
- 11月22日 第2回通史専門委員会第二部会開催。

12月13日 第2回通史専門委員会第三部会開催。
12月16日 第4回資料ワーキンググループ開催。

●2003(平成15)年

1月14日 第5回資料ワーキンググループ開催。
1月27日 第6回資料ワーキンググループ開催。
3月 5日 第18回百年史編集委員会開催(平成14年度事業報告、平成15年度事業計画・予算案、刊行計画の変更について)。
3月13日 総務部・経理部・東北大学研究教育振興財団・東北大学出版会との百年史刊行に関する話し合い。
4月21日 第5回通史専門委員会部会長会議開催。
4月23日 第19回百年史編集委員会開催(関係資料の使用に関する申し合わせ、『東北大学百年史』の配布、抜刷りについて)。
5月31日 『東北大学百年史』4「部局史1」刊行。
7月29日 第3回通史専門委員会第二部会開催。

8月 7日 第7回資料ワーキンググループ開催。
8月18日 第3回通史専門委員会第一部会開催。
11月12日 第8回資料ワーキンググループ開催。
11月19日 第20回百年史編集委員会開催(「資料1」について)。



2003年6月25日付「河北新報」

●2004(平成16)年

3月 8日 第21回百年史編集委員会開催(平成15年度事業報告、平成16年度事業計画・予算案)。
3月31日 『東北大学百年史』8「資料1」刊行。
6月30日 第4回通史専門委員会第一部会開催。
9月29日 「部局史4」編纂にかかる説明会開催。

●2005(平成17)年

2月28日 第22回百年史編集委員会開催(平成16年度事業報告、平成17年度事業計画・予算案、百年史編集委員会要項の改正について)。
3月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第10号発行。
3月31日 『東北大学百年史』5「部局史2」刊行。
6月13日 大西仁百周年記念事業実行委員長より刊行計画の再検討についての要請。
6月30日 第4回通史専門委員会第二部会開催。

7月12日 刊行計画の見直しについて、大西仁百周年記念事業実行委員長と今泉編集委員長との話し合い。

7月26日 第23回百年史編集委員会開催(刊行計画の再検討について)。全13巻から全11巻に、1000部から800部に、それぞれ削減。

12月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第11号発行。

●2006(平成18)年

3月 7日 第24回百年史編集委員会開催(平成17年度事業報告、平成18年度事業計画・予算案)。
3月31日 『東北大学百年史』6「部局史3」刊行。
6月12日 第25回百年史編集委員会(メール会議)開催(『東北大学百年史』webサイト転載について)。6月12日送信・27日承認。
7月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第12号発行。
12月31日 『東北大学百年史』7「部局史4」刊行。

●2007(平成19)年

1月31日 第26回百年史編集委員会(メール会議)開催(平成18年度事業報告、平成19年度事業計画・予算案、刊行計画修正案について)。1月31日送信・2月20日承認。
3月 7日 第6回通史専門委員会部会長会議開催。
10月31日 『東北大学百年史』1「通史1」刊行。

●2008(平成20)年

2月 5日 第7回通史専門委員会部会長会議開催。
3月 7日 第27回百年史編集委員会開催(平成19年度事業報告、平成20年度事業計画・予算案、刊行計画変更について)。
3月17日 第3回通史専門委員会第三部会開催。
7月 1日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第13号発行。

●2009(平成21)年

1月30日 『東北大学百年史』2「通史2」刊行。
3月19日 『東北大学百年史』10「資料3」刊行。
3月25日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第14号発行。
11月30日 『東北大学百年史』11「資料4」刊行。

●2010(平成22)年

2月26日 『東北大学百年史』9「資料2」刊行。
3月19日 『東北大学百年史』3「通史3」刊行。
3月25日 『東北大学百年史編纂室ニュース』第15号発行。
3月31日 東北大学百年史編纂室廃止。

『東北大学百年史』（全11巻）略目次

●『東北大学百年史』刊行年次

- 平成15年度 第4巻「部局史1」、第8巻「資料1」
 平成16年度 第5巻「部局史2」
 平成17年度 第6巻「部局史3」
 平成18年度 第7巻「部局史4」
 平成19年度 第1巻「通史1」
 平成20年度 第2巻「通史2」、第10巻「資料3」
 平成21年度 第11巻「資料4」、第9巻「資料2」、第3巻「通史3」

● 第1巻「通史1」（平成19年10月31日、845頁）

第1部 東北大学の百年

- 第1編 東北帝国大学の創設
 東北帝国大学設置運動、東北帝国大学の創設、農科大学の設置と分離、理科大学の設置、医科大学の設置、臨時理化学研究所の設置
- 第2編 東北帝国大学の整備・拡充
 大学制度の改革、鉄鋼研究所から金属材料研究所へ、工学部の設置、法文学部の設置、昭和初期の東北帝国大学、戦前期東北帝国大学の学生運動

第3編 戦時体制と東北帝国大学

人民戦線事件と大学自治問題、附置研究所の増設、戦時体制と動員

第4編 新制東北大学の発足

戦時体制の崩壊と教職追放、学部の新設、新制東北大学の発足と教育学部の設置、イールズ事件、新制大学院の発足、新制東北大学の整備と創立五十周年

● 第2巻「通史2」（平成21年1月30日、799頁）

- 第5編 高度成長期の東北大学
 科学技術振興と理工系学部の拡充、分校の統合と教養部の設置、教員養成課程の分離、青葉山移転、七・一七事件と大学自治、歯学部の設置
- 第6編 大学紛争の時代と大学改革
 大学改革への動き、大学立法と東北大学、大学改革の展開、教養部封鎖と大量留年、大学紛争後の東北大学、入学試験制度の改革、薬学部の設置、医療技術短期大学部の併設

第7編 大学院重点化と将来構想

教養部の廃止と全学教育体制の展開、研究所の改組・転換、研究センター等の新設、大学院の重点化、法人化と将来構想、国際交流と産学連携、キャンパス移転

● 第3巻「通史3」（平成22年3月19日、858頁）

第2部 東北大学の諸相

- 第1編 理念と学風
 研究第一主義、門戸開放と実学尊重、「東北大学の理念」の作成とその影響
- 第2編 管理運営
 総長・学長選出方式の変遷、大学の自治と評議会・教授会、女性教職員と学内保育施設
- 第3編 入試と教育
 入試、一般教育の理念とカリキュラム
- 第4編 学生生活
 学生生活の変遷、東北帝国大学時代の「生協」——医学部自治会と法文共済部、学生寮

第5編 社会との交流

東北振興と東北帝国大学、斎藤報恩会と東北帝国大学、地域社会の中の東北大学、同窓会

第6編 国際交流

戦前期における教員の海外留学、外国人留学生の教育、外国の大学等との学術協定

第7編 キャンパス

キャンパスの変遷、東北帝国大学時代の建築

第3部 年表

● 第4巻「部局史1」(平成15年5月31日、953頁)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 第1編 事務局 | 第7編 法学研究科・法学部 |
| 第2編 (旧)学生部 | 第8編 経済学研究科・経済学部 |
| 第3編 附属図書館 | 第9編 (旧)教養部 |
| 第4編 (旧)法文学部 | 第10編 (旧)言語文化部 |
| 第5編 文学研究科・文学部 | 第11編 国際文化研究科 |
| 第6編 教育学研究科・教育学部 | |

● 第5巻「部局史2」(平成17年3月31日、969頁)

- | | |
|------------------------|---------------|
| 第1編 理学研究科・理学部 | 第3編 歯学研究科・歯学部 |
| 第2編 医学系研究科・医学部・医学部附属病院 | 第4編 歯学部附属病院 |

● 第6巻「部局史3」(平成18年3月31日、989頁)

- | | |
|---------------|------------------|
| 第1編 薬学研究科・薬学部 | 第5編 生命科学研究科 |
| 第2編 工学研究科・工学部 | 第6編 環境科学研究科 |
| 第3編 農学研究科・農学部 | 第7編 教育情報学研究部・教育部 |
| 第4編 情報科学研究科 | |

● 第7巻「部局史4」(平成18年12月31日、957頁)

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 第1編 金属材料研究所 | 第17編 未来科学技術共同研究センター |
| 第2編 加齢医学研究所 | 第18編 アドミッションセンター |
| 第3編 流体科学研究所 | 第19編 (旧)遺伝生態研究センター |
| 第4編 電気通信研究所 | 第20編 (旧)大型計算機センター |
| 第5編 (旧)素材工学研究所 | 第21編 (旧)情報処理教育センター |
| 第6編 (旧)科学計測研究所 | 第22編 (旧)総合情報システム運用センター |
| 第7編 (旧)反応化学研究所 | 第23編 情報シナジーセンター |
| 第8編 多元物質科学研究所 | 第24編 保健管理センター |
| 第9編 サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター | 第25編 史料館 |
| 第10編 遺伝子実験施設 | 第26編 学生相談所 |
| 第11編 大学教育研究センター | 第27編 川渡共同セミナーセンター |
| 第12編 留学生センター | 第28編 百万ボルト電子顕微鏡室 |
| 第13編 学際科学研究センター | 第29編 環境保全センター |
| 第14編 東北アジア研究センター | 第30編 埋蔵文化財調査研究センター |
| 第15編 極低温科学センター | 第31編 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー |
| 第16編 総合学術博物館 | 第32編 医療技術短期大学部 |

● 第8巻「資料1」(平成16年3月31日、789頁)

- | | |
|--|---|
| 第1編 東北大学の百年 | 第2章 東北帝国大学の整備・拡充(大正8年～昭和11年) |
| 第1章 東北帝国大学の創設(明治32年～大正7年)
設置運動、東北帝国大学の設置、農科大学の開設、理科大学の開設、医科大学の開設、附属図書館の設置、臨時理化学研究所の設置、農科大学の分離 | 大学令の施行、工学部の設置、附属鉄鋼研究所の設置と金属材料研究所への改組、法文学部の設置、附属電気通信研究所の設置 |

- 第3章 戦時体制と東北帝国大学(昭和12年～昭和20年)
附置研究所の増設、附属諸学校等の設置、戦時体制の強化
- 第4章 新制東北大学の発足(昭和20年～昭和32年)
戦時体制の解体と教職追放、農学部の設置、文学部・法学部・経済学部の独立、新制東北大学の発足と教育学部の設置、諸学校の包括・併合と分校の設置、新制大学院の発足
- 第5章 高度経済成長期の東北大学と管理運営問題(昭和33年～昭和48年)
教育研究施設等の新設、工業教員養成所の設置、歯学部設置、薬学部の設置、医療技術短期大学部の併設、分校の統合と教養部の設置、教員養成課程の分離と青葉山移転問題

- 第6章 紛争と大学改革(昭和44年～平成5年)
大学の運営に関する臨時措置法問題、教養部封鎖と大量留年、教育研究施設等の増設、全学教育体制の創設と大学院独立研究科の新設
- 第7章 大学院重点化と将来構想(昭和62年～平成13年)
研究所の設置と改組、研究センター等の新設、大学院の重点化、多元物質科学研究所の設置、キャンパス移転計画と将来構想

● 第9巻「資料2」(平成22年2月26日、782頁)

第2編 東北大学の諸相

第1章 管理運営

戦前の管理運営制度、新制東北大学の整備、管理運営検討委員会と概算要求問題、管理運営検討委員会の報告、改革委員会と大学改革

第2章 学生生活

学生生活の様相、学生生活調査、留学生の学生生活

第3章 紛争と事件

瀧川事件と東北帝国大学、イールズ事件、自衛官入学問題

第4章 大学と戦争

学徒勤労動員に関する教官の見解、空襲・敗戦と東北帝国大学

第5章 社会との関わり

門戸開放と女性の入学、戦前期における教員の海外留学、東北振興と東北帝国大学、国際交流の展開

第3編 式辞・告辞

第1章 東北帝国大学・旧制東北大学時代

第2章 新制東北大学時代

● 第10巻「資料3」(平成21年3月19日、957頁)

第4編 一覧・統計

第1章 組織

大学組織の沿革、講座と研究部門の変遷、事務組織の変遷

第2章 人事

主要人事、教職員数

第3章 研究と教育

受賞者、博士学位授与数、学生数、国際学術交流協定

第4章 経費と資産

経費、土地建物面積

● 第11巻「資料4」(平成21年11月30日、729頁)

第5編 画像資料

第1章 建築物・記念碑

第2章 所蔵学術資料

第3章 学部・大学院

第4章 附置研究所

第5章 学生生活

第6章 事件

第7章 国際交流・公開事業

第8章 式典

第9章 キャンパスの変遷

『東北大学百年史』第二巻「通史二」の 編纂を終えて

東北アジア研究センター教授
通史専門委員会第二部会長

平川 新



『東北大学百年史』は、通史3巻、部局史4巻、資料4巻、の全11巻で構成されている。私が担当した「通史二」は、昭和33年（1958）から創立百周年の平成19年（2007）までを対象としている。

先に刊行された「通史一」は、明治29年（1896）の設置運動開始から昭和32年（1957）の創立50周年までの本学の歴史を収めている。この50年間については、昭和35年（1960）に『東北大学五十年史』が刊行されており、「通史一」は現段階の視点から改めて、この前半50年の歴史を振り返ったものである。だが「通史二」が対象とする後半の50年は、今回初めて歴史編纂の対象となった。

『経済白書』で「もはや戦後ではない」と謳われたのは、昭和31年（1956）のことである。この頃から昭和40年代まで、日本は驚異的な経済成長の時代に突入した。沿海工業地帯が各地に形成され、エネルギーも石炭から石油に変わった。こうした上げ潮ムードをうけて政府は、昭和35年（1960）に所得倍增計画を策定し、国民に生活向上の夢を与えた。実際には計画の10年をまたずして国民所得は倍増した。

こうした日本経済の復興は、とうぜん大学のあり方にも大きな影響を与えた。昭和30年代には、産業経済の発展を支えるために科学技術の振興策が策定され、大学における研究教育体制の整備が進められた。本学でも理工系分野の拡充がはかられ、学生定員も倍増する勢いをみせている。高度経済成長によって豊かになった社会は高学歴化を促進し、大学の規模拡大としてもあらわれてきたのであった。

後半50年史のもう一つの大きなエポックは、川内・青葉山キャンパスへの移転であった。米軍キャンプとして利用されていた川内地区は、昭和32年（1957）に返還され、翌年から教養部分校の移転が始まった。工学部の青葉山への移転は昭和39年（1964）、文科系学部の川内移転は同48年（1973）のことである。片平キャンパスは本部機構として残ったため、学科や学生定員の増だけではなく、本学は空間的にも飛躍的に拡大したのであった。

そのキャンパスは今また、再編期を迎えた。青葉山ゴルフ場跡地に片平や雨宮、川内の一部施設が移転するために、現在、工事が進められている。移転が完成したさいには、雨宮キャンパスの閉鎖や片平キャンパスが一部縮小される予定になっている。また文科系学部のある川内

南キャンパスも仙台城二の丸跡にあるため、国指定史跡となった仙台城との関係で将来的には移転問題に直面する可能性がある。キャンパス再編問題は今後、東北大学のさらなる転換を促すことになるかもしれない。

後半50年史で忘れることができないのは、昭和40年代に全国的に吹き荒れた大学紛争である。本学でも教養部の封鎖や大量留年などが発生した。学生や教職員の考え方や生き方に大きな影響を与えることになった。

大学の性格を大きく変えたのは、大学院重点化と国立大学の法人化である。本学では平成5年度に教養部の解体と併行して、学部をもたない独立研究科である情報科学研究科と国際文化研究科が設置された。これに続いて翌年から平成12年度にかけて、既存大学院の学科・講座の再編と重点化がおこなわれた。この大学院重点化は大学院学生定員の増加をもたらしたが、一方では少子化等による大学の再編や縮小等の影響から、全国的に教員や研究職ポストが減少し始めている。こうした事態を反映した博士後期課程の定員割れと就職難は、年ごとに深刻になりつつあるとあってよい。

また平成16年（2004）4月1日、全国の国立大学は一斉に国立大学法人に移行した。従来の制度では予算・人事・組織編成に限界があったので、予算運用や教育研究組織の改変に柔軟性を与えるためだといわれている。実際、法人化以後の大学運営は、意志決定や予算配分のあり方などが、それまでとは一変した。大学の体質は明らかに変わりつつある。

こうしたいくつもの変化の過程を、「通史二」では多くの資料にもとづいて実証的に描いている。それらをどう評価するか。本書をひもとくなかで、それぞれの思いをめぐらしていただければと思う。



写真左頁は、第6編の中扉

大学新聞の歴史（下）

百年史編纂室編纂員

中川 学



「大学新聞の歴史（上）」（『東北大学百年史編纂室ニュース』第8号、平成13年）では、本学大学新聞の嚆矢にあたる昭和3年（1928）11月の『東北帝大法文時報』から、昭和10年10月創刊の『東北帝国大学新聞』と3年後の休刊までの動きを紹介した。以下では、戦後の『東北学生新聞』、2つの『東北大学新聞』併存問題を中心に、現在までの動きを概観したい。

『東北学生新聞』の創刊

昭和21年（1946）6月5日、東北大学新聞社は『東北学生新聞』を発刊した（注1）。その創刊号には「従来の孤立的態度を一擲し、広く東北地方学園民主化の線に沿はんが為」と記されているように、東北地方における大学・高等学校・専門学校の学生・生徒を対象とした旬刊（月3回）の学生新聞であった。もっとも、これは創刊の準備段階から東北地方の学生全般を対象にした新聞として構想されていたものではない。その当初は「東北大学新聞を復刊する」という目的で新聞部員が募集されていたが、政府の新聞用紙割当委員会との折衝の過程で、東北地方の各学校のニュースも入れるという条件が示され、最終的に『東北学生新聞』という名称になったのである（「戦後復刊のころ」）。



写真1 『東北学生新聞』第4号（昭和21年8月15日）

東北大学新聞社は片平地区の本部内に部室を持ち、中川善之助法文学部教授を部長として、学生が編輯局・営業局の2つに分かれて運営を行っていた（印刷は河北新報社に依頼）。昭和21年段階の構成は法文学部13名、工学部9名、医学部2名、理学部1名の計25名となっている（『在学生団体届綴Ⅰ』）が、翌年以降は東北地方の高等学校・専門学校生徒もメンバーに加わった。創刊当初は東北地方唯一の学生新聞だったため、各高等学校等からも購読申込みを受け、

その発行部数は1万5千部にもものぼった。同新聞の特徴としては、論文が多く掲載されていた点があげられる。たとえば第4号の1面には小谷鶴次法文学部助教授の「国際信用の回復」が掲載されており（写真1）、この論文重視の方針は、本を手に入れることが難しいという当時の学生のニーズに応えたものといわれている（『東北大学新聞』第242号、昭和32年10月10日）。

『東北大学新聞』への改称と『東北大学教養部新聞』との合併

昭和25年（1950）6月5日、『東北学生新聞』は第100号を区切りとして、次号から『東北大学新聞』と改称し、新たにスタートすることとなった。その背景としては、東北地方の各高等学校等が新制大学になると同時に、おのおのが新聞を持つようになったため、東北大学の学内新聞としての色彩を強めざるをえなかったのである（「新聞4年の歩み」）。

一方、昭和26年5月1日には新たに『東北大学教養部新聞』が発刊される。これは富沢地区の分校第一教養部内に置かれた東北大学教養部新聞会が編集・発行したものである。同新聞は東北大学史料館に保存されている部数が3部と少ないため、その組織など不明な点が多いが、分校第一・第二・教育教養部など各分校2～3名の学生を新聞会員として募集していることから、前期教養課程の学生らによる学生新聞であったことがうかがえる。記事の内容に目を向けると、大学祭（「一教祭」）における「東北農村の矛盾をつく」といった研究報告のほか、特に教養部自治会や学生運動関係などの記事が目立つ（『東北大学教養部新聞』第6号、昭和27年12月10日、写真2）。同新聞は教養部に視座を置き、その情報を取り上げていたものといえるだろう。



写真2 『東北大学教養部新聞』第6号（昭和27年12月10日）

記事の内容に目を向けると、大学祭（「一教祭」）における「東北農村の矛盾をつく」といった研究報告のほか、特に教養部自治会や学生運動関係などの記事が目立つ（『東北大学教養部新聞』第6号、昭和27年12月10日、写真2）。同新聞は教養部に視座を置き、その情報を取り上げていたものといえるだろう。

そして昭和30年9月20日には、東北大学新聞社と東北大学教養部新聞会が合併し、東北大学新聞会と改称された。『東北大学教養部新聞』は第22号で終刊となり、『東北大学新聞』として発行されることとなったが、これは全学統一新聞をめざす発展的合併として位置づけられていた。その背景としては、記事の重複や仙台市内の企業からの広告問題などがあったとされている（『東北大学新聞』第200号、昭和30年9月5日）。

合併後の第1号である『東北大学新聞』第201号では、新しく東北大学新聞会が発足すること、発行は半月刊で教養部支局を置くこと、スローガンは「全学統一新聞として、全学生の共通の広場」となることを会告として掲げている。そして、今後は「時評」や「論説」のほか、受験生向けの「入試応答室」、教授の家庭の話題を記した「茶の間談話」などの記事を掲載していく旨が記されていた。

2つの『東北大学新聞』—新聞社と新聞会の対立

ところが昭和41年（1966）9月5日、東北大学新聞会は東北大学学友会から脱退し、東北大学新聞社と改称することを紙面で宣言した（『東北大学新聞』同日号外、写真3）。「新聞社自立宣言」と銘打った号外では、学友会からの離脱理由を編集権擁護と新たな発展のためとしている。

この学友会とは元々、各学部ごとの教職員・学生によって設置された親睦団体（理学部の自修会や医学部の良陵会など）で、全学的な組織が生まれたのは大正9年（1920）である。昭和21年（1946）5月30日に再発足した学友会は、教職員・学生全員で構成され、学生の文化・体育などに関するサークル活動のための運営を担う組織となっていた。東北大学新聞会がいつから学友会に加入していたのかを明確にすることはできないが、脱退前には同新聞会は学友会から財政的援助を受けていた（昭和41年段階で年額30万円）。

新聞会のいう「編集権擁護」とは何だったのか。これに先立つ昭和41年7月9日、学友会総務部役員会では、新聞会の活動が「公正な全学的報道機関」ではない「一党一派に偏したもの」として批判が出され、今後の対応として全学

から編集委員を公選するという「新聞会員公選制」を決議した（「学友会総務部役員会議事要録」）。これを編集権の侵害と捉え、『東北大学新聞』の学友会機関誌化に抵抗するとして、新聞会側は先の行動に出たのであった。

実際の紙面はどうだったのか。昭和30年代前半までの紙面には学生運動関係の記事を扱った論説もあるものの、「大学を支える陰の人々」といった学内関係ニュースや読書・映画・演劇・美術などの学芸欄も確認できる（『東北大学新聞』第272号、昭和34年4月11日）。しかし、昭和38年以降の『東北大学新聞』はスローガンの1つに「学生新聞は学生運動と同じく、学生の利益を代表し、共通の運動の中で、イデオロギー的側面を担う」と記していることからわかるように、まさに学生運動報道機関としての性格を強めていった（同第366号、昭和39年1月10日）。象徴的な事例として、昭和38年11月10日発行の「大学祭記念特集号」をあげると、中ソ対立や改憲問題などの論文や学生運動の記事がかなりの部分を占めており、読者が大学祭の行事内容を知ることはできない（同第363号）。

そして昭和41年11月25日には東北大学新聞社に対抗する形で、もうひとつの『東北大学新聞』が発行されることとなる。学友会の公選制で選ばれた学生によって作られた東北大学新聞会が発行する同名の新聞である（以下、学友会版）。学友会版は新聞社のそれを「かねてから学



写真3 『東北大学新聞』号外（昭和41年9月5日）

内ニュースに乏しく、一定の思想潮流の宣伝機関となっている」(学友会版『東北大学新聞』復刊第4号、昭和42年4月10日)と批判し、「大学におけるコミュニケーションとしての学生新聞」となることを宣言していた(同復刊第1号、昭和41年11月25日、写真4)。これに対し、新聞社側は「東北大学新聞乗っ取り」「デッチ上げ第二新聞」(新聞社版『東北大学新聞』第424号、昭和41年11月25日)などと紙面で批判をおこなうなど、両者の対立は激しさを増していた。この2つの新聞騒動は当時の一般紙にも取り上げられており、その背景に学生運動の勢力争いがあるとみなされている。たとえば『読売新聞』(昭和40年10月1日朝刊)では、東北大学新聞社は社会党系の社会主義青年同盟(社青同)の色合いが濃いもの、東北大学新聞会は日本共産党系の日本民主青年同盟(民青同)、との教養部教授のコメントを掲載している。

新聞社版の休刊

翌昭和42年(1967)1月には新聞社が新聞会に対して、紙名と団体名の変更を要求するなどの動きもみられたが、新聞社・新聞会はともに片平地区学生第二ホールの部室で活動をおこない、大学のなかに同名2紙が併存する状況はその後20年ほど続いた。紙幅の都合もあり、詳細は略すが、東北大学新聞社は昭和43年頃、学生団体東北大学新聞社と名称を変更したとみられ(新聞社版『東北大学新聞』第455号、昭和43年5月15日)、大学紛争期の昭和44年11月24日にはデモをめぐる機動隊とのトラブルを理由に、宮城県警・仙台中央署の家宅捜索を受けている(『朝日新聞』昭和44年11月25日朝刊)。その後も発行を続けるものの、平成元年(1989)1月の第905号をもって休刊となり、再刊されることはなかった(学友会版『東北大学新聞』第271号、平成9年1月30日)。一方の東北大学新聞会は、昭和42年(1967)12月に学友会新聞部となり、平成18年(2006)1月以降は学友会報道部として『東北大学新聞』の発行を続けている(注2)。

大学新聞と大学史

以上、戦後の大学新聞の流れを概観した。これを簡単にまとめると、昭和21年(1946)に、東北地方の学生を対象として発刊された『東北学生新聞』、これが東北大学の学内新聞として



写真4 『東北大学新聞』復刊第1号(東北大学新聞会、昭和41年11月25日)
同新聞には「復刊第1号」という表記とともに、旧新聞会版の最終号(第418号)を引き継ぐ形での通巻番号(第419号)も付されている。正統性のアピールといえようか。

表1 戦後における大学新聞の変遷

昭和21年 6月	『東北学生新聞』が発刊（東北大学新聞社）。
昭和25年 6月	『東北学生新聞』は『東北大学新聞』と改称。
昭和26年 5月	『東北大学教養部新聞』が発刊（東北大学教養部新聞会）。
昭和30年 9月	『東北大学新聞』が『東北大学教養部新聞』を合併（東北大学新聞会と改称）。
昭和41年 9月	東北大学新聞会が学友会から脱退（東北大学新聞社と改称）。
昭和41年11月	学友会による『東北大学新聞』が発刊（東北大学新聞会）。
昭和42年12月	東北大学新聞会は学友会新聞部と改称。
昭和43年頃	東北大学新聞社は学生団体東北大学新聞社と改称。
平成元年 1月	新聞社版『東北大学新聞』が休刊。
平成18年 1月	学友会新聞部は学友会報道部と改称。

『東北大学新聞』となる。昭和41年からは学生運動の勢力争いにより、2つの同名新聞が併存し、平成元年（1989）以降は学友会版『東北大学新聞』のみが発刊を続け、現在に至る、となるだろう（表1参照）。

大学新聞が学生関係の豊かな情報を刻んだ、大学史研究に不可欠な資料であることはいまでもないが、その利用にあたっては、発行団体とその性格を把握することが必要不可欠である。百年史編纂室では、旧学生部の協力を得て、大学新聞の調査・収集・整理をおこない、その結果、旧学生部所蔵の大学新聞が東北大学史料館に移管されることとなった。今後、大学新聞を利用する方々の便となれば幸いである。

（注1）同新聞社が東北帝国大学に提出した書類には、その名称が「東北学生新聞社」と記されている（『在学生団体届綴Ⅰ』）が、『東北学生新聞』本紙では「東北大学新聞社」が使用されているため、ここでは後者を用いた。

（注2）上記の大学新聞のほか、「東北大学新聞会」と称する団体が発行する『東北大学生新聞』（通称は生〔なま〕新聞）がある。これは昭和48年（1973）4月10日創刊で、第6号までは『東北大学キャンパス』と称していた。東北大学webサイトによると、同新聞は「本学とは一切関係のない学外の団体が発行する非公式の新聞」であって、「全国の複数の大学で確認される「カルト団体の活動」とされているものである。

（おもな参考文献）

- 『東北学生新聞』・『東北大学教養部新聞』・『東北大学新聞』 東北大学史料館所蔵
- 『在学生団体届綴Ⅰ』昭和21年（旧学生部史料429）同所蔵
- 「学友会総務部役員会議事要録」（旧学生部史料59）同所蔵
- 中川善之助「新聞4年の歩み」（『東北大学新聞』第101号、昭和25年6月5日）
- 対談「学生紙の変遷を辿る」、座談会「東北大学新聞の歴史の回顧」（『東北大学新聞』第200号、昭和30年9月5日）
- 一力一夫「戦後復刊のころ」（『東北大学新聞』第242号、昭和32年10月10日）

（付記）本コラムを執筆するにあたり、香川郁子氏（百年史編纂室元教務補佐員）に関係資料の収集・整理とデータ作成の援助を受けた。また学友会報道部の矢野目奈穂氏からは、同部の名称変更のついでの教示を得た。ここに謝意を表したい。最後に筆者の怠慢により、本コラム（上）の公表からかなりの時間を要したことについて、関係諸氏にお詫び申し上げる。

『東北大学百年史』第3巻、第9巻、第11巻 刊行のお知らせ

『東北大学百年史』第3巻「通史3」(2010年3月刊、858頁)

この巻には通史1・2の「第1部 東北大学の百年」に続いて、「第2部 東北大学の諸相」と「第3部 年表」が収められています。

東北大学の創立から百周年まで通時的に叙述した第1部に対して、「第2部 東北大学の諸相」はテーマごとに東北大学の歴史を叙述しています。内容は理念と学風、管理運営、入試と教育、学生生活、社会との交流、国際交流、キャンパスなど多岐にわたりますが、個別テーマからの視点により東北大学の新たな側面を発見することでしょう。

また「第3部 年表」は100頁以上のボリュームで、『東北大学五十年史』の略年表に比し、大変充実した年表となっています。これには一般事項を除き、東北大学に関係するすべての事項に出典を記し、特に「通史1」・「通史2」に記事がある事項には、その巻数と頁数を明記しています。これにより年表が単なる事項の羅列に終わらず、そのことに至る当時の事情や背景など、総合的な理解を得る手がかりを与えてくれます。もちろん「通史1」・「通史2」に記載のない、新たな事実の発掘の成果も多く盛り込まれています。

年月日	事	項
10.-	狩野文庫を購入〔通1-120、部1-171〕。	
11.7	附属医学専門部薬学科の卒業証書を授与〔年報綴 明治44年度以降〕。	
11.18	附属医学専門部医学科の卒業証書を授与〔年報綴 明治44年度以降〕。	
大正2年(1913)		
3.20	附属工学専門部の卒業式を同専門部講堂にて挙行〔官報〕。	
4.1	県立宮城病院を附属医学専門部附属医院とする〔通1-150〕。	
4.8	附属工学専門部の入学式を挙行〔工専図書館日誌〕。	
4.20	奥田義人文部大臣が来学、附属工学専門部を視察〔工専図書館日誌〕。	
4.21	第3回通俗講演会を開催(24日まで)〔官報〕。	
4.-	第三臨時教員養成所を第二高等学校から移管〔資3-20〕。	
5.1	附属医学専門部に看護婦養成所を設置〔資3-20〕。	
5.9	澤柳政太郎総長が京都帝国大学総長に転任、北條時敬広島高等師範学校長が総長に就任〔通1-96〕。	
5.13	澤柳政太郎元総長が理科大学の校友会組織を自修会と命名〔通1-96〕。	
7.5	自修会の発会式を理科大学講堂にて挙行〔通1-97〕。	
7.5	農科大学の第6回卒業式を挙行〔雑書綴〕。	
8.1	第1回物理学化学実験指導を実施(10日まで)〔通1-119〕。	
8.1	第2回夏期学術講演会を開催(7日まで)〔官報〕。	
8.21	帝国大学ではじめて女子学生の入学を許可(牧田らく・丹下ウメ・黒田チカ)〔通1-102〕。	
9.11	入学宣誓式を挙行〔廊堂片影〕。	
9.22	東北帝国大学開学式兼東北帝国大学理科大学開学式を挙行。理科大学、附属工学専門部を一般公開(26日まで)〔通1-104〕。	
10.1	附属医学専門部薬学科の卒業証書を授与〔年報綴 明治44年度以降〕。	
10.31	「天長節拝賀式」を附属工学専門部講堂にて挙行〔工専図書館日誌〕。	
11.11	附属医学専門部医学科の卒業証書を授与〔年報綴 明治44年度以降〕。	
大正3年(1914)		
1.1	新年祝賀式を附属工学専門部講堂にて挙行〔工専図書館日誌〕。	
3.16	附属工学専門部の卒業式を挙行〔官報〕。	
		明治44年~大正3年 (5) 780

写真は、第3部「年表」の一部

『東北大学百年史』第9巻「資料2」(2010年2月刊、782頁)

この巻には、「東北大学の諸相」と「式辞・告辞」に関する資料が収録されています。

「東北大学の諸相」は、第1章「管理運営」、第2章「学生生活」、第3章「紛争と事件」、第4

章「大学と戦争」、第5章「社会との関わり」から構成されています。日本ではじめて女性の入学を許可した際の手紙や、昭和10年に実施された学生生活の調査報告など、戦前の東北帝国大学の様子がうかがえる資料のほか、第二次世界大戦中の昭和19年8月に実施された、学徒勤労動員に関する調査結果を収録しました。戦時下という非常時において教官たちが示した多種多様な見解は、国家体制と学術研究との関係などについて、大きな示唆を与えてくれるはずです。また、昭和25年のイールズ事件に関しては、大学側が設置した臨時調査委員会による報告書の全文を、昭和40年代の大学改革に関しては、全国的に注目されていた東北大学管理運営検討委員会の報告などを収録しました。

「式辞・告辞」には、総長・学長が入学式や卒業式で述べた式辞・告辞を収録しました。第1章「東北帝国大学・旧制東北大学時代」と第2章「新制東北大学時代」という2章構成となっています。原稿等が存在しない3名を除く17名の歴代総長による祝辞を、1名について1～2編ずつ収録しています。これらの資料には大学の理念が色濃くあらわれているだけでなく、戦争・高度経済成長・国際化といった激動する社会に対して、大学がどのような姿勢をとってきたかが示されています。

本巻の前巻にあたる第8巻「資料1」には、大学組織の改廃に関わる法令などといった基本資料が収録されているのに対して、本巻はテーマごとに構成されています。200点以上の収録資料に目を通すことによって、東北大学のさまざまな側面をうかがうことができると思います。

『東北大学百年史』第11巻「資料4」(2009年11月刊、729頁)



写真は、第1章「建築物・記念碑」の一部

この巻は「第5編 画像資料」として、創設以来の大学の建築物・風景や学生生活の様子、そしてキャンパスの変遷などの写真を中心に910点にも及ぶ画像資料を収めました。

第1章には、片平・星陵・雨宮・川内・青葉山の主要5地区を中心に、現存する歴史的建築物や記念碑の撮り下ろし画像を、それらの配置を示す航空写真とともに掲載しました。第2章には、各部局の協力を得て、代表的な所蔵学術資料を掲載しました。これら2つの章は、あわせて112頁ありますが、建築物や学術資料の質感がリアルに伝わるようにカラー頁としました。

第3章、第4章では、学部・大学院・附置研究所について、部局毎にその歴史を画像資料によりたどりました。第5章では、学生生活の諸相に関する画像資料、第6章には、戦争、イールズ事件、昭和40年事件、大学紛争といった東北大学に影響を与えた事件に関する貴重な画像資料、第7章には国際交流と公開事業に関する画像資料、第8章には入学と卒業、創立記念の式典に関する画像資料を掲載しました。第9章では、主要5地区を中心に各地区の建物配置図と同時期の航空写真や周辺地図を掲載しました。創設期から現在に至るまで、大学の拡張の様子を追うことができるでしょう。第3章から第9章は、やや暖色系の補色を用いたダブルトーンの画像処理を施し、雰囲気の良い仕上がりとなっています。

巻末には、掲載画像一覧と索引を用意しました。画像資料の検索が容易にできると思います。

判型はこれまで刊行されたものと同様A5変型判とコンパクトな仕上がりとなっていますが、版面をいっぱいに使っていますので、航空写真なども見やすいものとなっています。

略目次は、本誌7～9頁を参照下さい。

『東北大学百年史』をお求めの場合は、東北大学出版会（TEL 022-214-2777）までお願いします。

● 受贈図書一覧（学外のみ掲載 2009年3月～2010年3月）

● 2009（平成21）年

- | | |
|--|--|
| 3月9日 京都大学より『京都大学大学文書館紀要』第7号 | 4月27日 法政大学より『法政大学大学史資料集』第30集 |
| 3月16日 南山大学より『南山学園史料集』4 | 5月13日 全国大学史資料協議会東日本部会より『全国大学史資料協議会東日本部会二十年の歩み』 |
| 4月10日 立命館大学より『立命百年史紀要』第17号 | 5月25日 京都大学より『第三高等学校関係資料 解説・目録』、『京都大学の歴史』 |
| 4月13日 中央大学より『中央大学史資料集』第21集、
『中央大学史紀要』第14号 | 7月6日 京都大学より『吉田寮関係資料 解説・目録』 |
| 創価大学より『創価教育』第2号 | 7月29日 武蔵野美術大学より『武蔵野美術大学大学史史料集』第6集 |
| 成蹊学園史料館より『成蹊学園史料館資料集』5、
『成蹊学園史料館資料集』6 | |
| 桃山学院大学より『桃山学院年史紀要』第28号 | |

百年史編纂室日誌抄録

2009年
3月
～
2010年
3月

2009(平成21)年

● 3月

- 6日 吉田正志教授(法学研究科)通史3の資料調査
- 9日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 13日 大内孝教授(法学研究科)通史3の資料調査
- 30日 吉田正志教授(法学研究科)通史3の資料調査
- 31日 柳原敏昭准教授(文学研究科)通史3の資料調査
中野渡俊治室員(教育研究支援者)退職

● 4月

- 1日 高橋陽一室員(教育研究支援者)採用
- 13日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 27日 佐藤勢紀子教授(高等教育開発推進センター)通史3の資料調査

● 5月

- 1日 羽田貴史教授(高等教育開発推進センター)通史3の資料調査
- 11日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 6月

- 5日 藤岡健太郎准教授(九州大学大学文書館百年史編集室)年史編纂に関する調査
- 8日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 7月

- 6日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 9日 佐藤勢紀子教授(高等教育開発推進センター)通史3の資料調査

● 8月

- 21日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 9月

- 18日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 10月

- 21日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 11月

- 18日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 30日 『東北大学百年史』第11巻「資料4」刊行

● 12月

- 16日 百年史編纂室スタッフ会議開催

2010(平成22)年

● 1月

- 13日 百年史編纂室スタッフ会議開催

● 2月

- 15日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 26日 『東北大学百年史』第9巻「資料2」刊行

● 3月

- 17日 百年史編纂室スタッフ会議開催
- 19日 『東北大学百年史』第3巻「通史3」刊行
- 31日 東北大学百年史編纂室廃止

平成22年3月、『東北大学百年史正誤表』を発行いたしました(第3巻「通史3」と第9巻「資料2」を除く)。同正誤表は、これまで百年史編纂室に寄せられた情報等をもとに作成したものです。貴重なご意見等をお寄せいただいた方々に感謝申し上げます。
なお、PDF版が東北大学史料館および東北大学出版会のwebサイトよりダウンロード出来ます。

● 編集後記

『東北大学百年史』全11巻の刊行を終え、平成22年3月31日をもって東北大学百年史編纂室は閉室となり、『東北大学百年史編纂室ニュース』も本号で最終号となります。大学を取り巻く環境が激変し、先のみえない時代にこそ、大学の歴史をひもとき、数多の叡智に学ぶことが求められるでしょう。百年史編纂室設置から13年におよぶ『東北大学百年史』の編纂によって生みだされたさまざまな成果が、その一助になることを願ってやみません。

東北大学百年史編纂室ニュース 第15号(最終号) 発行日: 2010年3月25日

編集・発行: 東北大学百年史編纂室

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

TEL 022-217-5042

FAX 022-217-4998

URL: <http://hensan.archives.tohoku.ac.jp/>

E-mail: hyakunen@bureau.tohoku.ac.jp